

水泳授業についての一考察

—— 特に大学の場合 ——

山 本 茂 紀 ※
山 本 和 子 ※

〈研究視点〉

水泳の授業に対する学生の評価（興味度）は決して高くない。シーズンに入り、水泳授業についての説明をすると、少なからぬ者が不快の表情を示し、実際に第一回目の授業では、欠席、見学の者が続出する。特に女子学生においてこの傾向が顕著であるが、男子学生としてその例外ではない。所謂、その時の天候、学生達の身体的条件、プールコンディション、その他、いろいろな要因があるとは思われるが、概して、他のスポーツ種目の場合とは異なるようである。全国的にみてもプールの設置状況は、小学校から大学までかなり充実してきており、児童生徒学生、それに指導者（教師）の水泳能力も著しく向上している。夏期には公営プール、私営プール、海水浴場といった水場は人々で賑わいをみせるし、SWIMMING クラブの数も増え、乳児、子供から年配者、更には妊産婦に至るまで積極的に泳ぎをとり入れ楽しむという時代となった。

しかし、これに反し水泳の授業となると学生達の間に何らかの拒絶反応が見られるのである。別の調査でも、水泳は好きだが授業での水泳は嫌いだ、という結果を得ている。

昔から子供達は水遊びが好きだと言われているし現在もこれに変わりはない。それが成長するに従って水泳嫌い（授業としての水泳）の増加という現象を呈するのは一体何故なのだろうか。表-1は本学の学生396名の水泳授業についてその好き嫌いを調査したものである。

調査内容は、小学校6年間、中学校及び高等学校各3年間を平均して、体育の授業でとりあげられた他のスポーツ種目と比べて、水泳の授業がどうであったかを問うたものである。

男女共に、小学校から中・高と学年が増す毎
※愛知大学

表-1 水泳授業の好き嫌い

	年代	好き	普通	嫌い
男子 (7クラス 280名)	小学校	67(名) 24%	133名 48%	80名 29%
	中学校	42(名) 15%	146名 52%	92名 33%
	高等学校	34名 12%	127名 45%	122名 44%
女子 (3クラス 116名)	小学校	74名 64%	21名 18%	21名 18%
	中学校	29名 25%	39名 34%	48名 41%
	高等学校	17名 15%	46名 40%	53名 45%
男・女合計 (10クラス 396名)	小学校	141名 36%	154名 39%	101名 26%
	中学校	71名 18%	185名 47%	140名 35%
	高等学校	51名 13%	173名 44%	175名 44%
	小・中・高 総計	263名 22%	512名 43%	416名 35%

に(授業での)水泳好きは減り、水泳嫌いが増加している。中学校に於ては、ほぼ $\frac{1}{2}$ の生徒が、そして高等学校では半数近くが水泳の授業を不本意ながら受けているという状況は一考に値する。

小学校から高等学校までのデータに比べて、大学生に対するそれは決して十分とは言えないし、また、指導者養成機関としての大学の授業形態が、間接的ではあるが児童生徒を指導する際に大きく影響しているだろうことは否定できない。これらの事柄を考えて、本研究では、「大学生に対する水泳の授業」というテーマをとりあげて、水泳嫌いを増加させている要因を探ろうとしたものである。

〈研究方法〉

(1)調査対象

全国の主な大学121校に調査を依頼し、98大学より解答を得た。(回収率81.0%) これらの大学は、体育学部をもつ国公立大学(含、短期大学)及び体育単科大学15本、国立教育大学6校、

国公立大学40校（教養部26校、教育学部10校、単科大学4校）、私立大学29校、それに国公立の短期大学8校である。

また、A教育大学体育専攻生74名、B大学一般学生454名（男子学生196名、女子学生184名）を被調査者とした。

(2)調査期間

調査期間としては昭和53年より55年までの3年間及び本年（昭和58年）をあて、A大学学生には夏期臨海実習時に、B大学学生に対しては体育授業時間帯（プールにおける水泳授業時）に調査を実施した。

(3)調査内容

調査事項は添付の調査用紙（No.1及び2）の通りであるが、本研究のテーマにそって以下の五項目にした。

①プールの設置状況について

プールの有無については、設置されている場合、短水路（25m）か長水路（50m）か、あるいは変形プールか、それに、水深は、また、屋内プールか屋外プールかを調査内容とした。

②プールでの水泳授業について

プールでの水泳授業の有無については、有の場合、その対象は一部の学生なのか全学生に対してか、一部の学生を対象とした場合それどのような学生なのか（体育専攻生、教職希望者、一般希望学生、その他）、授業内容は、水泳以外に、水球、飛び込み、シンクロナイズド・スイミング、スキンドайビング等のプログラムを持っているのかどうかを調査内容とした。

③学生の水泳能力について

学生の水泳能力については、全く泳げない（5m未満）、少し泳げる（25m未満）、泳げる（25m以上）の3段階に分け、全く泳げない者にはその理由（病気、泳げないのでサボッテ、見学ばかりしていた、努力したがだめだった。指導を受けたことがない）を、また泳げる者に対しては、いつ（小学校以下、小学校、中学校、高等

学校）、どこで（プール、海、河川等）、だれに（学校の先生、スイミングクラブの先生、親、兄弟、友人等）教わったのか、そして、今までに溺れそうになったことはあるのかないのか、あるとすればいつ、どこで溺れそうになったのか、大学でも水泳教室を開催した方がいいと思うかどうか、もしも水泳教室を開催したら参加したいかどうかを調査内容とした。

④水泳の授業担当者について

水泳の指導者（専門家）の有無、有の場合、体育担当教官中の人数比は、そして、その指導者にスキンドайビング（SCUBAダイビングも含む）の経験はあるのかどうか、あるとすればその程度はどのくらいかを調査内容とした。

⑤海浜における水泳授業について

海浜での水泳授業（臨海訓練、実習等）はあるのか、ないのか、ある場合、その対象学生は一部の学生に対してかあるいは全学生か。一部の学生を対象とした場合、それは体育専攻生、教職希望者、一般希望学生その他のいずれなのか。海浜実習での指導者はどのような構成か（大学内体育担当者、大学内体育担当者と外来講師、水泳の専門家（外来講師も含めてのみ）指導者の中に小型船舶操縦士免許を持つ者が何人いるか、プログラムの内容にはどのようなものがあるのか、（水泳、サーフィン、水上スキー、ダイビング、釣り、ヨット、和船、ボート、その他）また、前述414名の学生に対しては、小学校、中学校、高等学校の時に臨海学校があったのかなかったのか、そして、参加は全校生徒だったのか自由参加だったのかを調査内容とした。

〈結果と考察〉

(1) プール設置状況

表-2 プールの設置状況

			プールの有		プールの型			プールの設置場所		プールの深
			有	無	25m	50m	その他	屋内	屋外	深さ(m)
A・B両大学学生 454名	小学校	% 名	77.8 353	22.2 101	99.4 351	0.6 2	0			
	中学校	% 名	86.8 394	13.2 60	90.9 358	9.1 36	0			
	高等学校	% 名	88.5 402	11.5 52	88.6 356	11.4 46	0			
全国の主な大学 98校	大 学	% 名	70.4 69	29.6 29	44.4 36	45.6 37	10.0 8	11.6 89.4	10.6 68	0.8 ~ 3.8 平均1.26~1.81
上記大学分類別	15校	体育学部をもつ大学 及び体育単科大学	15	0	8	10	3	6	12	0.9 ~ 3.8 平均1.25~1.75
	6校	教育大学	6	0	3	4	1	0	7	1.0 ~ 1.95 平均1.23~1.57
	40校	国公立大学	35	5	18	14	3	1	34	0.8 ~ 3.0 平均1.26~1.80
	29校	私立大学	12	17	6	9	1	1	14	0.8 ~ 3.0 平均1.30~2.04
	8校	国 公 期 私 立 学	1	7	1	0		0	1	1.3 ~ 1.5

※大学の分類は(研究方法) (1)調査対象の項の分類による。

① プール設置率

A・B両大学の学生454名に対する調査結果では、小学校にプールがあったと答えた者77.8% (353名) なかったと答えた者22.2% (101名)、中学校では、有が86.8% (394名)、無が13.2% (60名)、高等学校では有が88.5% (402名)、無が11.5% (52名) となった。

地域差及び解答者の小学校時代から高等学校時代にかけての年度差もあるので全国的傾向と言いきることは出来ないが、小学校、中学校、高等学校と、学年が上がるに従ってプールの設置率も高くなっている。小中高のプール設置率の平均は84.36%である。

全国の主たる大学98校に対する調査では70.4% (69大学) にプールが設置されており、29.6% (29大学) にはプールはなかった。前記、小学校から高等学校までのプール設置率と比べてみると、大学の方がかなり低率でしかも各大学間では相当な差がみられた

体育学部をもつ四年制大学及び体育単科大学それに体育科のある教育大学、計21校では100%プールが設置されているが、これらの大学を除いた77校では62.3% (48大学) がプールを保有しているにすぎない。この77大学についてみると、国公立大学40校では87.5% (35大学) がプールをもっているのに対して、私立大学29校

では、41.4% (12大学) にしかプールは設置されていない。また国公立短期大学では8校中わずか1校で、それも他学部(四年制)との共有であった。ここでは私立大学および短期大学に於ける設置率の低さがはつきり読みとれる。

② プールの型

小学校から高等学校までのプールの型はほとんどが短水路プール(25m)であり、長水路プール(50m)はごくわずかで、小学校では0.6%、中学校では9.1%、高等学校では11.4%であった。飛び込み用プールとか、水球、飛板とびこみ、シンクロナイズド・スイミング、スキндаイビング等を可能にする多目的プールは全くなく、これらの全てが25mまたは50mのいわゆる競泳用規格プールであった。

大学においては、全体の約半数が長水路プール(50m)となり、小中高の場合とのちがいがみられ、飛び込み用プールをもつ大学も率としては低いが、4大学ある。前記多目的プールも3大学にあり、またある大学では1校で3種類のプールを有している。しかし全体としてはやはり大部分を占めるのは小中高同様に競泳用規格プールでありそれ以外の型は例外というか、ごくまれである。

③プールの設置場所

小学校、中学校および高等学校においてはプールのほとんどが屋外に設置されており、プールを保有する69大学についても屋内プールがあるのはわずか11.59%（8大学）にすぎない。これも体育学部を有する大学を除くと更に少なくなり、国立大学では41校のうち2.4%（1大学）私立大学においては12校中1校である。これらをもとにして考えると、学校プールのほとんどは屋外に設置されているといえることができる。

④プールの深度

プールの深度については、飛び込み用プールを除き、最低80cmから最高3.8mまでであった。浅い方の平均は1.26m、深い方のそれは1.81mで、水深2m以上のプールは全体の23.2%であった。（最大水深2m—6校、2.5m—3校、3m—7校）これらにより、大学におけるプールのほとんどは、水深2m未満とよみとることができる。また、プール本体が泳ぎ（競泳）志向に設計されているもので他のプログラム（飛び込み、水球、シンクロナイズド・スイミング、ダイビング等）を実施する上では十分な水深とはいえない。

(2)プールでの水泳の授業

①水泳授業の有無

水泳授業の有無については、体育学部をもつ大学および体育単科大学、それに教育大学では100%の実施率である。これらの体育系大学を除くと、国立大学（40校）では、82.5%（33大学）が実施しており、私立大学（29校）では、34.5%（10大学）が実施、65.5%（19校）の大学では水泳の授業は行なわれていなかった。

国立大学の水泳授業実施率に比べて、私立大学での実施率の低さが目立つが、これは両者間のプール保有率の差とも関連がありそうである。

②水泳授業の対象者

体育学部を有する15大学については、全学生を対象として水泳の授業を行なっているものが6大学、一部の学生（体育専攻生および一般の学生）を対象とするものが11校でこの中には、1年次全員必修、2年次選択、1年次または2年次で選択とするものが各々1大学であった。

教育大学では全学生を対象とするもの2大学、体育専攻生および一般希望学生を対象とするもの3大学、体育専攻生および教職課程履修者を

表-3 98大学におけるプールでの水泳授業

	水泳授業の有無	対象者						授業内容						
		有	無	希望学生	全学生	体育専攻生	教職希望者	希望学生数	水泳	水球	とびこみ	シンクロナイズド・スイミング	ダイビング	その他
体育学部をもつ大学と体育単科大学	15校	15	0	11	6	8	—	4	15	6	4	2	2	SCUBA
教育大学	6校	6	0	4	2	4	1	3	6	1	0	0	1	
国立大学（教育学部）	26校	23	2	15	8	15	9	7	23	6	4	0	2	
国立大学（教養部）	10校	6	4	4	2	0	0	3	6	2	0	0	1	
国公立単科大学	4校	4	0	0	4	0	0	4	4	0	0	0	0	
私立大学	29校	10	19	8	2	0	1	5	10	3	0	0	1	
短期大学	8校	3	5	2	1	0	1	0	3	0	0	0	2	

対象とするもの1大学であった。

国立大学で、教育学部を有する26大学中水泳の授業を行なっている23大学についてみると、全学生対象のもの8大学、一部の学生対象のもの15大学であった。一部の学生の内訳は、体育専攻生だけを対象とするもの2大学、教職課程履修者を対象とするもの1大学、体育専攻生および教職課程履修者を対象とするもの5大学と、これらに含めて、一般希望学生を対象とする7大学である。

その他の国公立大学51校については、水泳の授業のある23大学中、全学生を対象とするもの9大学、一部の学生を対象とするもの14大学であった。一部の学生とは、教職希望者を対象とする2大学、一般希望学生を対象とする8大学(うち1大学は体育実技の水泳選択者を対象)、体育実技履修者を対象とする3大学、それに、25m未満の水泳能力者に対し、水泳教室を開催している1大学である。

全調査校、98大学についてみると、全学生を対象に水泳の授業を行なっているものが25.5%(25大学)、一部の学生を対象としているものが、44.9%(44大学)であり、率から推測すれば、多くの学生に水泳の機会が与えられているようであるが、この中には体育系の学生、教職課程履修者が、表-3でもわかるように、かなり含まれているので、これを考慮すると、率はあまり高いとはいえなくなる。また、水泳教室を開催している大学もわずか2大学しかみられない。こうしたことから水泳の初心者にとっては、大

学にはその学習の場、機会はほとんどないと推論することができる。

③プールでの授業内容

授業のプログラムとしては、従来の各種泳法の他にいろいろとりあげられている。それらは、水球26.9%(水泳授業を課する67大学中18大学) スキンダイビング14.9%(10大学、含SCUBAダイビング)、飛びこみ11.9%(8大学、含飛板とびこみ)、その他、救助法(3大学)、シンクロナイズドスイミング(3大学)、日本泳法(2大学) カヌー(1大学)であり、全体としては35.8%(24大学)が、何らかの上記プログラムをとり入れている。しかし注目すべきは、体育学部をもつ15大学については、53.3%(8大学)が“泳ぎ”以外にプログラムをもたず、更に教育大学6校についても、88.3%(5大学)が同様に他のプログラムをもっていなかった点である。両者を合わせると61.9%となり実に、体育専攻生の半数以上の者が水泳の授業では泳ぎ以外のプログラムを経験していないということになる。

(3)学生の水泳能力

①泳力について

泳力については、全く泳げない—5m未満、少し泳げる—25m未満、泳げる—25以上の3段階に分けて調査した。A・B両大学生454名については84.8%が25m以上の泳力があり、15.2%が25m未満の泳力しかなかった。

表-4 学生の水泳能力

	泳力			水泳を覚えた時期						水泳を覚えた場所				水泳を教えてくれた人					
	2m未満	25m未満	25m以上	就学前	小学校	中学校	高等学校	その他	プール	海	河川	その他	学校の教師	のスイミングクラブ	親	兄弟	友人	その他	
①A 大学 (体育科学生 74名)	0名 0%	5.4 7.3	70.6 94.6	0	65.5 87.8	5.3 6.3	2.7 2.7	2.7 2.7	62.8 83.8	3.4 4.1	2.3 3.0	2.7 9.1	40.5 54.0	5.8 6.8	8.1 10.8	4.4 5.4	7.5 9.5	7.1 13.5	10.5
②B 大学 (男子学生 196名)	2名 1.0%	20 10.2	174 88.8	13 6.6	132 67.4	33 16.8	9 4.6	9 4.6	154 78.6	15 7.6	20 10.2	7 3.6	84 42.9	5 2.5	16 8.1	5 2.5	41 21.0	23.0	45.0
③B 大学・女子 (体育実技出席者 105名)	1名 1.0%	16 15.2	88 83.8	4 3.8	85 81.0	10 9.5	4 3.8	2 1.9	96 91.4	2 1.9	4 3.8	3 2.9	79 75.2	2 1.9	5 4.8	5 4.8	9 8.5	5 4.8	5.0
④B 大学・女子 (体育実技見学者 79名)	2名 2.6%	24 30.4	53 67.0	3 3.8	59 74.7	8 10.1	3 3.8	6 7.6	67 84.8	5 6.3	1 1.3	6 7.6	45 57.0	2 2.5	4 5.0	1 1.3	18 22.8	9 11.4	9.0
③+④ (女子学生 184名)	3名 1.6%	40 21.7	141 76.6	7 3.8	144 78.3	18 9.7	7 3.8	8 4.4	163 88.6	7 3.8	5 2.7	9 4.9	124 67.4	4 2.2	9 4.9	6 3.3	27 14.7	14 7.6	14.0
①+②+③+④ (男女学生・計 454名)	5名 1.1%	64 14.1	385 84.8	20 4.4	341 75.1	56 12.3	18 4.0	19 4.2	379 83.5	25 5.5	27 5.9	23 5.1	248 54.6	14 3.0	33 7.3	15 3.3	75 16.5	69 15.2	69.0

体育科をもつA大学と体育科をもたないB大学とを比較した場合、25m以上の能力をもつ学生は94.6%対82.9%とA大学学生の方が優れていた。また、B大学の男女学生の泳力を比べてみると、男子では88.8%が25m以上泳げるのに対して、女子では76.6%と低位であり、更に女子を、体育実技出席者と同見学者に分けて比べると、83.8%対67.0%となり、体育実技見学者の方が出席者より率がかかなり低いことがわかる。

全く泳げない者には、その理由を書かせたが、それらは、身体的条件(病気等)、見学(泳げない為に何から理由をつけて見学してします)、努力したが泳げるようにならなかった。これまで水泳の指導を受けたことがない等であった。

表-4と表-5を比較してみれば、この20年間に、泳力については男女共かなり向上していることを読みとることができる。特に女子の進歩は著しいが、それでもなお、男子では約10人に1人、女子では約10人に3人が25m以上泳ぐことができない現状である。

表-5 泳力

	泳力		
	5 m 未満	25 m 未満	25 m 以上
男子(18才)	5.1(%)	14.8(%)	80.1(%)
女子(18才)	30.2(%)	46.7(%)	23.1(%)

—昭和34年・文部省体育局—

②水泳を覚えた時期

男子も女子も、90%以上のものが高等学校入学以前に水泳を覚えたとしている。小学校時代が群を抜いており、次いで、中学時代と続く。一般に水泳を覚えるには小学校も低学年時までで、とよくいわれるが、このことを表-4は明確に示している。

この時期の児童生徒の水泳能力に直接関係してくるのは、担当教師自身の水泳能力である。表-4・5及び6-A、6-Bより、最近では教師の水泳能力も一段と進歩していることが推測される。

表6-A 教員の水泳能力

	性別	人数	泳げない人 ^(%)
小学校	男子	2,075人	3.8%
	女子	1,985	45.0
中学校	男子	1,756	5.4
	女子	498	38.8
高等学校	男子	926	7.2
	女子	196	43.2
小・中・高合計	男子計	4,747	5.1
	女子計	2,679	43.7

C県 小・中・高教員水泳能力表 学校体育第19巻第9号 山本発表 (昭和41年)

表6-B 小学校教員の泳力

		5m未満	25m以上	50m以上
昭和41年	男子	3.0%	89.4%	
	女子26~30才	31.9%	33.8%	
	男子	25.4%	39.4%	
昭和53年	男子	1.8%	91.7%	80.0%
	女子	12.9%	48.6%	24.3%
	女子26~30才	4.7%	63.0%	

—昭和54年・文部省ニュース—

表6-Bで明らかであるが、男女教員間の泳力差は大きい。しかし、特に若手の女子教員の伸びは、小学校低学年担当者に女性が多いことから注目される。泳げる先生を求めめる傾向はこのところ増々高まっており、教員採用試験(小学校課程)に水泳実技を採用するようになった府県も昭和52年の21%から昭和54年の60%と着実に増えている。

③水泳を教えてくれた人

水泳を教えてくれたのは、小学校・中学校の教師という答が圧倒的である。最近ではスイミングクラブが各地に出来、低年令層の子供達に対する水泳教室等もひんばんに開催されているので、この調査では3%にすぎなかった、スイミングクラブ指導員という答の割合も増えてくることが予想されるが、最も影響力を及ぼすのは学校教師である点是不変であろう。男子に比べて、女子の水泳能力向上の為に特に学校教師の役割が大であることをこの表から読みと

ることができるが、また一方では、特に活発な男子は就学前から泳ぎを覚える者も多く、その場所にしてもプール、海、河川と活動範囲は広がり、水泳を教えてくれた人も、学校教師ばかりでなく、親、兄弟、友人、自分自身等と様々である。

④溺れた経験の有無

表-7 溺れた経験の有無

	溺れそうになったことが		溺れそうになった時期					溺れそうになった場所				
	あ	な	就学前	小学校	中学校	高等学校	プール	海	河川	その他		
A 大学 (男女 74名)	18 24.3%	56 75.7%	3 17.6%	12 70.5%	0	2 11.8%	6 33.3%	6 33.3%	4 22.2%	2 11.1%		
B 大学 (男子 196名)	44 22.4%	152 77.6%	4 9.1%	33 75.0%	1 2.3%	6 13.6%	9 20.5%	21 47.7%	10 22.7%	4 9.1%		
B 大学 (女子 184名)	18 9.8%	166 90.2%	3 15.0%	16 80.0%	1 5.0%	0	7 38.9%	5 27.8%	5 27.8%	1 5.5%		
合計 (男女 454名)	80 17.6%	374 82.4%	10 2.2%	61 76.3%	2 2.5%	8 10.0%	22 27.5%	32 40.0%	19 23.8%	7 8.7%		

男子学生では約10人に2人、女子学生では約10人に1人が溺れそうになった経験をもっており、その時期としては、やはり小学校時代に集中している。また、溺れそうになった場所については、男子では海、女子ではプールと答えたものが多いが、これは前に述べた、男子と女子では活動の範囲が異なるのでこのような結果に

②水泳指導者の有無と水泳プログラムとの関係

表-9 水泳指導者とプログラムの関係

	水泳の授業		水泳以外のプログラム		プールの有無		
	ある	ない	ある	ない	ある	ない	
水泳指導者のいる大学 (64大学)	体育学部をもつ大学 (13)	13	0	7	6	13	0
	教育大学 (4)	4	0	1	3	4	0
	国立大教育学部 (20)	19	1	7	13	17	3
	国立大教養部 (6)	4	2	2	4	5	1
	国公立単科大学 (2)	2	0	0	2	2	0
	私立大学 (16)	8	8	3	13	9	7
短期大学 (3)	3	0	2	1	1	2	
水泳指導者のいない大学 (34大学)	体育学部をもつ大学 (2)	2	0	0	2	2	0
	教育大学 (2)	2	0	0	2	2	0
	国立大教育学部 (6)	6	0	2	4	6	0
	国立大教養部 (4)	2	2	0	4	3	1
	国公立単科大学 (2)	2	0	0	2	2	0
	私立大学 (13)	1	12	0	13	4	9
短期大学 (5)	0	5	0	5	0	5	
水泳指導者のいる大学	64大学	53 (82.8%)	11 (17.2%)	22 (34.4%)	42 (65.6%)	51 (79.7%)	13 (20.3%)
水泳指導者のいない大学	34大学	15 (44.1%)	19 (55.9%)	5 (14.7%)	29 (85.3%)	19 (55.9%)	15 (44.1%)

なったと推測される。

(4)水泳授業担当者

表-8 水泳指導者(専門家)の有無

	水泳指導者(専門家)	
	いる	いない
体育学部をもつ大学 (15大学)	13(87.7%)	2
教育大学 (6大学)	4(66.7%)	2
国立大学教育学部 (26大学)	20(76.9%)	6
国立大学教養部 (10大学)	6(60.0%)	4
国公立単科大学 (4大学)	2(50.0%)	2
私立大学 (29大学)	16(55.2%)	13
短期大学 (8大学)	3(37.5%)	5
総計 (98大学)	64(65.3%)	34
体育系学生を有する大学を除く51大学	27(52.9%)	24

①水泳指導者(専門家)の有無

水泳の指導者(専門家)については、98大学中64大学(65.3%)が“いる”と解答した。体育系の学生をもつ大学はやはり比率としては他の一般大学に比べ高いが、予想していたより低率であった。

前述のように、子供達の水泳能力に最も関与するのは小・中学校の教師であり、これら教師の養成機関たる大学の役割りを考えてみると、この水泳指導者の比率はあまり高いとはいえない。

水泳指導者の有無と水泳プログラムとの関係を見てみると、水泳指導者のいる大学で水泳(泳ぎ)以外のプログラムをもつ大学は34.4%、これに対し、水泳指導者のいない大学では、5.8%と、かなりの差がある。また水泳の授業の有無およびプールの有無についても水泳指導者のいる場合と、いない場合では、授業は82.3%対44.1%、プールは79.7対55.9%とはっきり差となっており、あらわれている。更に、体育系学生を有する大学を除いた51大学についてそれぞれ比較してみても、プログラムでは25.9%対0%、授業では、63.0%対20.8%、プールでは63.0%対37.5%となり、一層水泳指導者の有無と水泳プログラムとの関連性が深いことがわかる。

(5)海浜における水泳授業

①海浜における水泳授業の有無

表-10 小・中・高時の臨海学校

A・B 大学学生 (454名)	臨海学校											
	小学校				中学校				高等学校			
	あった	なかった	無解答	全員参加	自由参加	あった	なかった	全員参加	自由参加	あった	なかった	全員参加
72名	328	54	64	8	45	409	42	3	17	437	9	8
15.9%	72.2%	11.9%	88.9%	11.1%	9.9%	90.1%	93.3%	6.7%	3.7%	96.3%	52.9%	47.1%

A、B 両大学学生で、小・中・高等学校に於ける臨海学校経験者は9.8%であり、これらは、小学校時代15.9%、中学校時代 9.9%、高等学校時代 3.7%と学年と共に低下している。又、小・中学校では臨海学校が持たれる場合、その参加対象者の約90%が全員参加となっているが、高等学校になると約50%が自由参加とその参加形態に違いが見られる。

次に各大学の海浜における水泳の授業(臨海実習または訓練等)を見てみると、全体としては98大学中の53.1%(52大学)がこのプログラムをもっているが、そのうち、65.4%(34大学)は、体育専攻生を対象とした臨海訓練であり、これら体育系の学生を有する大学を除く51大学では率は下がり21.6%(11大学)となっている。

②参加対象者

体育専攻学生に対しては、そのほとんどに必須課目として海での訓練が課せられている。(93.3%—15大学中14大学)。一方、一般希望学生に対しては、98大学中の16.3%(16大学)と低率ではある。が、とにかく海浜におけるプログラム参加への道は開かれている。

③指導者(海浜における授業担当者)

海での指導者を、a)大学内体育担当者、b)大

表-11 海浜に放ける水泳授業

	臨海訓練		対象学生					指導者			小型船舶操縦士の免許		プログラムの内容									
	有	無	全学生対象	一部対象				学内教官	学内教官+学外教官	学外を含め水泳専門家のみ	有	無	水泳	ウインドサーフィン	水上スキー	スキングダイビング	釣り	ヨット	和船	カヌー・ボート	救助法・救急法	その他
				体育専攻生	教職希望者	一般希望学生	その他															
体育学部を持つ大学(15大学)	14	1	4	9	1	2	2	10	3	2	6	8	14	0	0	2	0	0	1	3	2	1
教育大学(6大学)	6	0	5	4	1	3	0	2	4	0	3	3	6	1	1	2	2	2	3	1	1	1
国立大学教育学部(26大学)	21	5	1	19	4	3	1	11	8	1	8	13	21	0	1	7	5	3	5	8	2	1
国立大学教養部(10大学)	4	6	0	2	0	2	0	1	3	0	1	3	3	1	1	3	1	0	0	1	0	0
国公立理科大学(4大学)	2	2	1	0	0	1	0	2	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
私立大学(29大学)	5	24	0	0	0	5	0	5	0	0	1	4	5	0	0	0	0	0	1	0	0	0
短期大学(8大学)	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総計(98大学)	52	46	11	34	6	16	3	29	20	3	19	33	51	2	3	14	8	5	10	13	5	3
	(53.1%)	(46.9%)	(21.2%)	(55.4%)	(11.5%)	(30.8%)	(5.8%)	(55.8%)	(38.5%)	(5.8%)	(36.5%)	(63.5%)	(98.0)	(3.8%)	(5.8%)	(26.9%)	(15.4%)	(9.6%)	(19.2%)	(23.0)	(9.6%)	(5.8%)
体育系の学生を有する大学を除く(51大学)	11	40	1	2	0	8	0	6	5	0	2	9	10	1	1	3	1	0	1	1	0	0
	(21.6%)	(78.4%)	(9.1%)	(18.2%)		(72.7%)		(54.5%)	(45.5%)		(18.2%)	(81.8%)	(90.9)	(9.1%)	(9.1%)	(27.3%)	(9.1%)		(9.1%)	(9.1%)		

校内体育担当者と外来講師、㉔水泳の専門家(外来講師を含む)のみの3様に分けてみると、㉑が55.8%、㉒が38.5%、そして㉔が5.8%であった。

海浜における授業では、ボート(特にエンジン付き)等も、監視、救助その他で使用される頻度も高いと考え、指導者のボート免許の有無についても調べてみたが、免許有りと答えたのは、海浜でのプログラムをもつ52大学中36.5%(19大学)であった。

表-12 モーターボート免許の有無およびダイビングの経験度

	ボート免許		スキューバダイビングの経験		スキューバダイビングの技能程度			初心者程度
	あり	なし	あり	なし	有資格者	無資格だが豊富	中程度	
海浜のプログラムをもつ大学(52大学)	19 (36.5%)	33 (63.5%)	30 (57.7%)	22 (42.3%)	4 (12.9%)	13 (41.9%)	10 (32.3%)	4 (12.9%)

また、次のプログラムの内容のところでもふれるが、海浜における水泳以外のプログラムの第1位種目はスキューバダイビング(SCUBAdivingも含む)となっている。このスキューバダイビングについての指導者の経験度は表-12のとおりであるが、中には初心者程度というものもあるので、実際にスキューバダイビングの指導が可能な教官は約50%となる。しかしSCUBAdivingの有資格者(潜水指導員)は、わずか4名にすぎない。

「総括」

以上、水泳授業について、調査項目別に分析を試みたが、これらをまとめてみると、以下の4項目に総括される。

①屋内プールの必要性

我が国の学校プールの大部分は屋外プールである。この屋外プールの可動率は、多くみて4ヶ月間、年間の $\frac{1}{3}$ であり、この間には夏季休暇も1ヶ月余あるし、更に、気象条件等にも左右されるので、実際の利用頻度は更に少なくなる。

水泳の授業が実施されるのは、晴天の、プールコンディションの良い時ばかりではない、悪コンディション下に於ても行なわざるをえない

場合がある。しかし、この時の水泳の授業は、教える側、教わる側、相方にとっても好印象を与えるものではない、一方では、それが水泳嫌いを増やす要因ともなっている。

屋内プールの有為性を端的に示すのは、地域社会に於ける、スイミングクラブのプールである。仮に、これらのプールが、学校プール同様屋外に設置されているとしたらどうなっていたであろうか。結果は明白であり、現在の興盛はありえない。是非、学校に於ても屋内プールの実現が望まれる。

②プログラムの多様化と規格外プールへの工夫

水泳授業に於ける、そのプログラムの画一性(泳ぎ志向)ははっきりした。新しいプログラム(各種プログラム)の動入が、水泳嫌いの増大を減ずる一助となることは間違いない。その為にも、従来のプールの型(25m、50m競泳用プール)の固定概念を取り除き、各種プログラムが実施できるような規格外プール(多目的プール)への取り組みが必要となってくる。

③水泳指導者の養成

子供達の水泳能力開発に最も関与するのは、小学校及び中学校に於ける教師であり、その養成機関たる大学の任は重く、プログラムの不十分さははっきりしている。本来水泳好きの児童生徒が、学年と共に水泳嫌いに転じていくという現象を考えると、これら指導者になるであろう教員志望学生に対する適切な指導が必要になってくる。

④水泳教室の開催

大学生の中には、依然として、水泳能力低位の者(25m未満の泳者)が見られる。そのほとんどは、水泳の授業に際し、欠席するか見学してしまうと答えている。別の調査でも、彼らの35.2%は水泳教室があれば参加したいとしている。これらのこのを考えれば、一般学生用授業とは別個のプログラムとして、初心者水泳教室の開催が望まれる。

指導に対する調査

以下の質問事項は、“大学生におけるダイビング(素もぐり)の現状分析”というテーマで、日本潜水学会に発表予定論文の資料とするものです。御多忙中恐縮ですが、御協力の程よろしく御願ひ致します。

愛知大学 体育研究室 山本茂紀

- (1) [] 大学 [] 学部
- (2) 大学にプールは [ある・ない] ある場合 [25m・50m・その他] その他で
二つ以上、変形プール等については、簡単な説明をお願いします。➡
プールは [屋外プール・屋内プール]
その深度は [] m ~ [] m
- (3) プールでの水泳の授業は、 [ある・ない]
あるとすれば、その対象は、[一部の学生・全学生] 一部の学生を対象とした場合、それは、
[体育専攻生・教職希望学生・一般希望学生・その他()]
プールでの授業内容は、[水泳・水球・とびこみ・シンクロ・スキндаイビング・その他()]
- (4) 水泳指導者について
水泳の指導者(専門家)は、[いる・いない]
いる場合、体育担当教官 [] 名中 [] 名で、その指導者のダイビング経験は [ある・ない]
ある場合、それは [有資格者・無資格だが経験豊富・中程度・初心者程度]
- (5) 海での訓練について
臨海訓練(実習)は [ある・ない]
その対象学生は [一部の学生・全学生] 一部の学生を対象とした場合、それは、
[体育専攻生・教職希望者・一般希望学生・その他()]
海での指導者は [大学内体育担当者・大学内体育担当教官と外来講師・水泳の専門家(外来講師も含)の
み]
臨海プログラムの内容は [水泳・サーフィン・水上スキー・ダイビング・釣り・ヨット→
→和船・ボート・その他()]
- (6) ダイビングについて
大学に、フィン・スノーケル・水中めがねといったダイビング用品が備えて [ある・ない]
あるとすれば、フィン [] 組・スノーケル [] 組、水中めがね [] 組
大学に、スキндаイビング、またはスクーバダイビングクラブが [ある・ない]
ある場合、人数は、男 [] 人、女 [] 人
クラブは [スキндаイビングクラブ・スクーバダイビングクラブ・両方]
クラブの用具は、三点セット(フィン・スノーケル・水中めがね) [] 組、タンク [] 本
レギュレーター [] 本、コンプレッサー [] 台、その他()
- (7) これから、ダイビングを授業でとり入れる予定は [ある・ない]

水泳に関する調査

()クラス、氏名()、出身高校()

- (1) 小学校にプールは (あった・なかった)、 そのプールは (25m プール・50m プール)
中学校にプールは (あった・なかった)、 そのプールは (25m プール・50m プール)
高 校にプールは (あった・なかった)、 そのプールは (25m プール・50m プール)
- (2) 泳力については (全く泳げない - 5m 未満・少し泳げる - 25m 未満・泳げる - 25m 以上)
全く泳げない理由は (病気 - () の為・泳げないのでサボって見学ばかりした為
努力したがだめだった・指導を受けたことがない)
泳げる人は、いつ - (小学校以下・小学校・中学校・高校)、どこで - (プール・海・河川)、
誰に - (学校の先生・スイミングクラブの先生・親・兄弟・友人・その他())
今までに溺れそうになったことは - (ある・ない)、ある人は、いつ - ()
どこで - ()
- (3) 小学校の時、臨海学校は (あった・なかった)、 参加は (全員・自由)
中学校の時、臨海学校は (あった・なかった)、 参加は (全員・自由)
高 校の時臨海学校は (あった・なかった)、 参加は (全員・自由)
- (4) 用具を使っのダイビングについて
ダイビングの経験は (ある・ない) ある人は、いつ - (小学校・中学校・高校)
どこで - (プール・海水浴・臨海学校・河川)、 誰に教わって - (先生・友人・親・兄弟・
自分・その他())、
使った用具は - (水中メガネ・スノーケル・フィン)
自分の用具 - (水中メガネ・スノーケル・フィン)を持っている。
用具は - (うまく使えた・うまく使えなかった・うまく使えず、溺れそうになったことがある)
ダイビング用品は、いくら位だと思いますか。
水中メガネ()円ぐらい、スノーケル()円ぐらい、フィン()円ぐらい
- (5) 授業で3点セットを使って、スキンドイビングを練習しましたか。
やってみて - (簡単にできた・何とかできた・とてもむずかしかった)
使い方のむずかしかった用具は - (なし・水中メガネ・スノーケル・フィン)
ダイビングに興味を - (持った・持たなかった)
機会があれば、海で、ダイビングをやってみようかと - (思う・思わない)
これからダイビング用品 - (水中メガネ・スノーケル・フィン・その他())
を買おうと - (思う・思わない)
- (6) 大学で水泳教室を開いた方がよいと - (思う・思わない)、参加 - (したい・したくない)
ダイビング教室を開いた方がよいと - (思う・思わない)、参加 - (したい・したくない)

